手術を施行した。術前MRI上，T1強調像にて脊髄後方より高信号・低信号・高信号の三層構造を持つ境界明瞭な髄内病変を認めていたが，手術及び病理所見により後方より成熟脂肪組織と硬い繊維性のガングリオン様細胞を含んだ部分とそしてまた成熟脂肪組織であることが確認され，軟膜下脂肪腫と診断した。手術は部分摘除に留め，術後症状の軽減をみた。

**51. 白血球増多，発熱などの炎症症状を伴った軟部肉腫2症例**

石井　猛，舘﨑愼一郎，佐藤哲造
米本　司　（県がんセンター）

症例1：84才女性，左大腿部脱分化型脂肪肉腫，入院時WBC36700，腫瘍切除後白血球数が正常化。血清GCSF値は術前249と高値。症例2：29才男性右大腿部MFH。術前白血球数17200，CRP 30. 1. 血沈153，高度貧血，ALP，LAPが高値であったが，腫瘍切除後すべて正常化した。術前血清GCSF値は325，IL 6が1580と極めて高かった。以上白血球増多，発熱などの炎症症状を伴ったGCSF産生軟部肉腫2症例を報告した。

**52. 当院における鏡視下半月板手術例の検討**

川口佳邦，南出正順，本田　崇
阿部　功　（県立東金）

当院にて，1992年4月から1995年3月までに施行した鏡視下半月板手術例44例44膝に対し，術後成績を調査し成績不良因子を検討した。日整会半月板治療成績判定基準にて治療成績を評価すると，術前平均32.8±20.1点が，術後平均86.6±17.3点と改善していた。術後成績不良因子として，変形性膝関節症含む軟骨傷害，靭帯不安定性が考えられた。さらに，術後成績不良例8例中6例が外側半月板傷害で，遺残半月板傷害の関与が示唆された。

**53. スポーツ選手のLove法の術後評価**

付岡　正，岡崎壮之，栗原　真
徳重克彦，金田庸一，栃木祐樹
（川鉄千葉・スポーツ整形外科）
鍋島和夫（鍋島整形外科医院）

腰椎椎間板ヘルニアに対するLove法の臨床成績に関する報告は多いが，スポーツ選手の復帰状況についての報告例は少ない。今回我々は当院でLove法を施行したスポーツ選手33例について，スポーツ復帰を中心に調査を行った。77%が元のスポーツ活動へ復帰，51%が症状出現前と同レベル以上に回復した。また，復帰レベルが低下した症例にスポーツ後の腰部疲労感を訴えるものが多かった。

**54. 膝関節半月板損傷のMRI診断能について**

鈴木千穂，西山秀木，平山次郎
（熊谷総合）

膝疾患83例85膝のMRI像と関節鏡所見とを対比し，半月板損傷の診断能について検討した。撮像はプロトン強調矢状断像，半月板はMinkの分類に基づき評価した。Scnsitivity，Specificity，Accuracyは内側半月板で92.9%，100.0%，97.6%，外側半月板で88.9%，97.9%，94.0%と，高い診断能を得たが，スライス方向の断裂では診断困難な例があった。False positive例には関節鏡よりMRIの方が実像を反映していると思われたものがあった。

**55. 当院に於ける関節鏡視下膝関節授動術の成績**

山下桂志，三橋　稔，和田佑一
清水　耕，小野智敏，山越弘明
青柳康之　（習志野第一）

当院で1992年以降施行した膝関節授動術20例の成績を検討した。内訳はホルミウム－YAGレーザーを用いた関節鏡視下授動術8例，ブリスマンフォース4例，その他4例であた。6か月以内の症例で関節鏡使用例が最終可動域に優れ，そのうちレーザー使用群は術後出血の合併症も少なかった。関節鏡視下膝関節授動術は関節内の癒着を直視下に処置でき安全かつ有用な方法であった。

**56. 膝人工半月板作製の試み**

蟹沢　泉，土屋明弘（千大）

膝人工半月板の作製を目的とし成熟家兎11羽を用いた動物実験を行った。左膝内側半月板をカーボンファイバーかコラーゲン膜に置換し，術後4週に屠殺し肉眼所見とHE染色による組織所見により評価した。結果はカーボンファイバーを用いた群では3例中2例で半月形を保っていたが，組織学的には異物反応が主体であった。コラーゲン膜を用いた群では脆弱な組織になっており，組織学的には炎症反応が強く見られた。

**57. 抗うつ剤が奏効したASHによる嚥下障害の2例**

田原正道，大木健資，林　謙二
田内利幸（国立精神神経センター国府台）

我々は頚椎に出現した強直性脊椎骨増殖症（ASH）により嚥下障害をきたした2例を経験した。症例は76才男性と69才男性。両症例とも骨増殖による食道の直

接的圧迫と，食物摂取による食道内部の機械的刺激が，食道の慢性的炎症をおこしたためと考えられたが，心理的要素の関与も考慮したスルピリド内服により症状は軽快した。また我々は文献および経験より骨化部厚18mm以下では保存治療を行なう，とする治療指針をたてた。

**58. 当院における骨ドック検診の現状と問題点について－DXA法とQUS法の比較検討－**

丸田哲郎，重田博夫，木元正史
森川嗣夫，山岡昭義，斉藤　隆
（船橋中央）

当院の骨ドック検診の結果と測定誤差の検診から踵骨超音波測定を閉経期前後の低骨塩量者スクリーニングに用いる場合，カットオフ値の見直し等により陽性率を上げる必要があると思われた。一方高齢者ではスクリーニングの陽性率が高く有用である。またBUAは微妙な測定肢位の変化に影響され踵の小さい人や小児への応用は注意を要するが，SOSは変動係数が小さく肢位の影響を受けず経時的観察の指標になる可能性が示唆された。

**59. 下肢静脈血行障害に対する超音波検査法の適応と限界**

金　泰成，大井利夫，大西正康
矢作龍二，畑　芳春，小山忠明
大瀬真人　（上都賀総合）

術後の合併症の一つである下肢の深部静脈血栓症（DVT）を超音波（カラードップラー）を用いて検索した。対象は18例19肢で3例の外傷以外は人工関節症例であった。DVTと診断した3例中2例はTHR施行例で無症候性であり術後2週で静脈速度の低下がみられ3週でDVTと診断した。DVTの診断法として超音波は検索範囲に一部制限はあるが非侵襲的で反復検査が可能であり有用と思われた。

**60. 中足骨切断と義足について**

長尾龍郎（富山県高志リハ病院）

近年増加している糖尿病性足部壊死のマネジメントはますます重要になっている。高齢者が多いため，下腿以上の切断は避け，可及的に抹消での切断が望ましい。

中足骨切断は従来一次治癒率が50－75％と低かったが，その治癒率を飛躍的に高めたKritter灌流法施行例について術後ケア，義足の問題と共に報告した。症例は61才男，糖尿病による右足指4本の壊死，切断後4週にて義足を得て自宅に退院し，その後も順調である。

**61. 脊椎疾患に対するvideo-assisted Laparoscopy snd Thoracoscopy**

出沢　明，立石昭夫，山根友二郎
篠遠　彰　（帝京大）

内視鏡視下手術は近年飛躍的に進歩しその診断と治療の両面で適用範囲も年々拡大しつつある。整形外科分野に於いては，脊椎分野に応用され椎間板切除（2例），神経根腫瘍摘出（2），脊椎椎体腫瘍摘出（3），植骨，椎体周囲膿瘍の排膿（3），生検（2），と適応範囲を広げ我々はこれまで応用してきた。minimally invasive spinal surgeryは術後の後療法とcost performanceの点で普及すると考えられるも手技的に充分に習熟し合併症を熟知して施行するべきと考える。

**62. 腹腔鏡下腰椎前方固定術**

山縣正庸，守屋秀繁，高橋和久
菅谷啓之，安原晃一，中村伸一郎
粟飯原孝人，新井　元，西須　孝
（千大）
山田英夫　（国立佐倉・外科）

腹腔鏡下手術を腰椎の椎間板切除および椎体固定に応用することを試みた。基礎的な動物実験の後，気腹法，腹壁吊上げ法の双方の展開法を用いて，腰椎椎間板障害の1例には経腹膜外路法による前方固定を，第5腰椎分離すべり症の1例に対しては経腹膜路法による前方固定を腹腔鏡下に行った。2例とも後腹膜腔からの椎間板の展開は可能で椎体固定に十分に広い視野を安全に確保することができた。脊椎外科における腹腔鏡専用の手術器具を開発する必要があるが，今後，更に脊椎固定術の分野の中で大きく発展する可能性のある手術手技であると考えられた。

**63. Laparoscopic spine surgeryの現状と展望－外科的立場から－**

山田英夫　（国立佐倉・外科）
西須　孝　（同・整形）
高橋和久，山縣正庸，守屋秀繁
（千大）

消化器外科および一般外科における内視鏡下外科手術の手技を応用し，Laparoscopic spine surgery（腰椎前方固定術）の手技の開発と確立を行った。本手技はL5-Sに対しては，abdominal approachで，L2-5に対してはextr aperitoneal approachにより行えた。